第25回（平成十九年）

斎王まつり

悠かなる歴史の風
いま吹きわたる

配役

子供斎王

早川　佳那
（斎宮小５年生）

斎王

安田　有希
（明和町）

女官

吉岡　真実
（大阪市）

須崎　恵実
（多気町）

宮本　見裂
（松阪市）

村林　佑子
（伊賀市）

菊本　有希
（津市）

舞人

別當　聖子
（津市）

伊藤　恵子
（豊田市）

小川あゆみ
（津市）

山田　琴美
（松阪市）

山崎　真実
（津市）

風流傘

辻　　泰
（鈴鹿市）

山中　松行
（鈴鹿市）

検非違使

奥田守因郎
（伊勢市）

近衛使

遠藤　照幸
（東京都）

舞人

竹本亜結乃
（明和町）

中村　　篤
（四日市市）

興了

田川　　修
（津市）

大谷　　厳
（津市）

岡森　義貴
（名張市）

風流傘

中村　勇夫
（鳥羽市）

随身

田中　　明
（津市）

小原　　毅
（名張市）

陪従

神保　弘志
（千葉県）

奥田　　勲
（四日市市）

興了

鈴木　直孝
（四日市市）

土屋　瑞穂
（松阪市）

吉岡美帆子
（玉城町）

長谷川祥子
（奈良県）

内侍

太和田陽子
（西宮市）

女別当

小坂美紀子
（鈴鹿市）

采女

高倉　奈央
（大台町）

鈴木　智恵
（松阪市）

西田　昌代
（東京都）

命婦

三輪　晴奈
（桑名市）

命婦

山本真由美
（松阪市）

濱田ちぐさ
（鈴鹿市）

稲垣　晴香
（津市）

女孺

藩　　瑋
（伊勢市）

曽我　聡子
（津市）

采女

堀　ゆかり
（大阪藤井寺）

小泉　里紗
（名古屋市）

井山　智草
（津市）

東浦麻里子
（松阪市）

喜田　ふみ
（鳥羽市）

女孺

斎王まつり二十五回を迎える

斎王まつりが今年で二十五回目を迎えた。

まさに継続は力なりである。

徐々にではあるが、全国的な知名度になりつつあり、ありがたいことである。

長くボランティアを続けている斎王まつり実行委員には心から感謝申し上げたい。

貴方達の存在があればこそ、まつりは続けてこられたのである。

斎王まつりは本当に目立たない地味な活動に支えられている。

地道に活動する姿は、郷土愛の賜物であると同時に、陰日向なく働く後姿を見せていただくと謙虚に毅然と生きる人間としての手本であると思う。

今年私達は大切な一人の仲間を病で亡くした。享年五十二歳。彼も天国できっと見守っていてくれる。

明るい話題もある。若い実行委員が増えてきた。たのもしい未来を感じる。

今回、斎王まつり実行委員会のパンフレット作成取材研修（二上山登山と御霊神社参拝）に際し、奈良県五條市観光協会、御霊神社、桜井市観光課、葛城市農林商工課、葛城市観光協会の協力を得た。記して感謝したい。

斎王まつりは出演者募集と同時に実行委員も募集しているので是非参加していただきたい。

斎王まつりは正直、高齢化がすすんでいるが、今、歴史の一ページの中にいることに誇りを持ち歩んでいきたい。

6/2（土）

斎王禊の儀
13：00～15：00
大池黄平公園にて
禊の儀再現（雨天中止）

前夜祭
雨天の場合・明和町総合体育館にて
17：00～21：00
現代版「斎宮うたあわせ」発表
第25回の斎王他披露等
特別ゲスト
MAZISTA（マジスタ）
KO-ISEE（コウシ）

6/3（日）

斎王群行
13：00～15：00（雨天中止）
上園芝生ひろば（斎宮駅北）から斎宮歴史博物館まで
斎王群行を再現

アトラクション斎王市
10：00～15：00
斎宮歴史博物館会場
ステージで
各種アトラクション
現代版「斎宮うたあわせ」
フォトコンテスト
募集

もくじ

斎王まつり配役…… 2
斎王まつり童・童女出演者…… 4
斎宮の歴史語り（その1）…… 6
斎宮跡の発掘調査…… 8
悠かなる歴史の風 いま 吹きわたる … 10
図書の紹介／実行委員会組織体制…… 18
実行委員会活動内容…… 19
斎宮歴史・ロマンを訪ねて…… 20
楠森神社と斎宮跡の荒祭宮…… 24
斎宮ものしりナンバーワン…… 27
群行衣裳…… 28
フォトコンテスト／斎王うたあわせ … 30
第24回斎王まつりの思い出 … 32

童・童女出演者

（順不同）

三谷 奈央　小山 裕介　加納 怡紀　有馬 一輝　野淵 茉耶　瀬川 真唯

北山すみれ　前野 智香　前野 百香　山本 千矢　松崎 万倫　池田 桃子

宮本 彩香　畑中 理那　中村 琴音　佐々木那月　佐々木美月

阪井 紋菜　浅沼 尚子　大浦 京華　寺家 瑞稀　早川 佳那　浅井沙耶佳

中西 彩斗

竹本悠季乃

西山 貴視

特別ゲスト

MAZISTA（マジスタ）

●プロフィール

迫力のある歌声とセクシーなファルセットを持つヴォーカルP.B.maaと、アグレッシブかつ繊細なダンスパフォーマンスを繰り広げるダンサーSHIN-G、UKAI、RYO、JUN-1の5人で作り上げるステージは、歌と踊りだけではなくエンターテイメントとしても彼らの魅力が感じられる。

2005年現在のメンバー5人でヴォーカル&ダンスユニットとして活動開始。翌2006年、ユニット名 MAZISTA（マジスタ）に決まる。

リーダーはヴォーカルのP.B.maa。 本名 中村 将也 28歳 三重県多気郡明和町出身。

特別ゲスト

KO・SEE（コウシ）

●プロフィール

大学卒業後、突然（口に＋で叶う）をモットーに、歌を始める。聞けば聞くほど味が出るR&Bテイストの洗練されたサウンドと甘く伸びやかな歌声、ひたむきで真っ直ぐな歌詞は誰もが共感できる。真直に心に届く歌声は彼のステージの魅力でもある。

そして、MAZISTA（マジスタ）のP.B.maa（ピービーマー）に憧れ、2006年7月に上京。都内クラブを中心に活動中。

本名 下村 興史 12月5日生まれ 25歳 三重県多気郡明和町出身。

斎王をひもとく

斎宮の歴史語り（その二）

ふるさとの語り部　山川　充造

六七二年六月、朝廷を二分した歴史に残る権力闘争「壬申の乱」が勃発し、翌年二月には勝利した大海人皇子が飛鳥・浄御原宮で即位し、天武天皇となった。

天皇には十人の皇子と七人の皇女が育っていた。その中で大来皇女と大津皇子は大海人皇子（天武天皇）と、すでに亡き后の大田皇女との間に産まれた子であり、母の妹で后の鸕野讃良が義母になっていた。天皇が即位し、鸕野讃良も立后して皇后になった。

皇后には天皇との間に草壁皇子という大来皇女より一歳下、大津皇子よりは一歳年上の皇子が育っていた。

時代は中国の唐に倣った律（刑法）令（行政法）によって国を統率する時代になっており、律令は時代に合わせて改正され、飛鳥・奈良・平安時代の政治や文化は試行錯誤の道をたどりながら国の形が創られていった。

壬申の乱に勝利したのは、朝明の河原より皇祖神「伊勢神宮」を望拝し、戦勝祈願の結果との思いから、天皇は律令の見直しに着手し、神宮の式年遷宮（二十年毎の社殿の建て替え）斎王制度（古代は先祖の神も天皇直接に参拝は出来なかった。）従って巫女の立場の女性が御杖代の役目を負って皇祖神の祭祀に仕えることを国の制度として決めた。

斎王とは、選ばれた未婚の皇女又は女王の中から、亀甲占いで決める。決まった女性には初斎院の部屋を設け、巫女の修行が課せられ、都の郊外の森と清らかな水に囲まれた場所を選び、約三年に及ぶ厳しい野宮修行の後、斎王として伊勢の地へ下向の旅に出る。

その立場は女性としては皇后に次ぐものと伝えられている。

十四歳の大来斎王は都を離れ、その魂は伊勢の神に支えられながら、どんな思いの旅であったのだろうか。

竹の都と呼ばれた伊勢斎宮の館は、いま祓川近辺で発掘が進む遺跡「竹川」の何処のあたりであろうか。

朝に夕に斎王として祈りの生活にも慣れた翌六七五年春二月、大来斎王には都から懐かしい阿閉皇女と十市皇女の訪問を受けた。

この若い女性達の訪問は、父や義母や弟の懐かしい都の噂に花が咲いたことであろう。

阿閉皇女は時に十五歳、大来斎王とは同じ歳の花咲く年頃にあった。のちに、草壁皇子の妃となり、草壁との間に産まれた皇子の崩御により、女帝として即位した元明天皇の若かりし頃の姿であった。一方の十市皇女は大来斎王の母違いの姉に当たり、壬申の乱の時も、夫・大友皇子と行動を共にすることもなく、母・額田姫と共に大津宮を脱出に成功している。

古代明日香の地に飛鳥浄御原宮を築いた天皇の人心掌握能力は、短い月日の内に山深い僻地を都に変えた。

六七八年四月、十市皇女の突然の悲報が大来の下にもたらされた。自殺の噂が流れ、都にも異質の風が吹いていることが斎宮の地でも感じられるようになった。

頑健な体を誇った天皇も、病に臥す日が目立つようになり、翌年には、六人の皇子を集め、国を治める約束事を守らせ、三年後には眷属を集めて浄御原律令の制定開始を命じ、その中には皇族から民に至まで色々の規制が掛けられ、一時期、男子の髻、女子の垂髪を禁じ、女子の乗馬も男子と同じく跨って乗るようになった。

草壁皇子を皇太子に任命し、二年後には文武両道に評判の高い大津皇子を呼んで皇太子の補佐役を命じた。時に大津皇子は二十一歳、天皇の一部始終の言動を傍らで見てきた皇后鸕野讃良は、我が子・草壁皇子と義理の子・大津皇子の立場を思い巡らす時、魂の揺れる思いがしたことであろう。

飛鳥と斎宮の間は義母と姪の立場から、何かと都の動静が伝えられていた。

病臓の続く天皇は、今まで政治的に規制されていた制度や罪人も旧に戻され、神仏の祈願や薬石の癒りも一向に高貴の身には通じる気配はなかった。

七月、「天下の事、大小を問わず皇后と皇太子に申せ」との勅が出された。

宮殿に飛来した紅い鳥を吉兆として、天武十五年の年号を朱鳥元年に改めたが、同年九月九日巨星落ちる如く天皇は崩御された。

皇后は称制（即位せず朝政を執る）を執り、全ての命令権を握った。

遺体は殯の部屋に移され、あまねく生前に仕えた皇族、貴族は九月二十四日より殯の宮の儀式に参列が命じられた。

斎宮の秋九月、大津皇子は初めて姉・大来斎王の所へ逢いに来ていた。理由は定かではないが、資料には「竊に」の文字が使われ、姉弟の間で密かな話が交わされたのか、万葉集巻二に歌が残る。

我が背子を大和へ遣ると小夜深けて
　暁露にわが佇ち濡れし

飛鳥に向かって独り帰る弟を見送る姉・大来斎王の哀しい歌である。

飛鳥に帰った大津皇子に待っていたのは朝廷に対する謀反の罪であった。十月二日逮捕され、大勢の官人や家族の見守る前で腹を切り、首を落とされ、后の山辺皇女は裸足で皇子に駆け寄り自殺したと歴史は伝える。

大来斎王は弟の喪により斎王の任を解かれ、赦されて弟の魂を二上山雄岳に祀り、独身のまま十六年の後に四十一歳の人生を閉じた。

参考資料　斎宮志　山中智恵子
語り部の　斎宮語り　山川修司

斎王一覧

斎王の伊勢滞在期間は短くて一年、長い人では三十一年という例があり、年齢は五歳から十五歳の少女に集中しており、最高で群行時三十二歳という斎王もいます。

＊は女王（天皇の娘以外の皇族女性）
（　）内は実在の確認できない斎王
○は斎宮に群行した斎王
△は斎宮に群行しなかった斎王

時代	歴代斎王	在任期間（年）	天皇
伝説の時代の斎王	豊鍬入姫（とよすきいりひめ）		崇神、垂仁
	倭姫（やまとひめ）		垂仁、景行
	五百野（いおの）		景行
	（伊和志真）（いわしま）		仲哀
	稚足姫（わかたらしひめ）		雄略
	荳角（ささげ）		継体
	磐隈（いわくま）		欽明
	菟道（うじ）		敏達
	酢香手姫（すかてひめ）		用命～推古
飛鳥	○大来（おおく）	六七三～六八六	天武
	○当耆（たき）	六九八～七〇一	文武
	○泉（いずみ）	七〇一～七〇六	文武
	○田形（たかた）	七〇六～？	文武～元明
	（多紀）（たき）	？	元明
	（円方）（まどかた）＊	？	元明
	（智努）（ちぬ）＊	？	元明
	○久勢（くせ）	？	元正
奈良	○井上（いのうえ）	七二一～？	元正～聖武
	○県（あがた）＊	？～七四九	聖武
	○小宅（おやけ）＊	七四九～？	孝謙
	○山於（やまのうえ）＊	七五八～？	淳仁
	○酒人（さかひと）	七七二～？	光仁
	○浄庭（きよにわ）＊	？	光仁
平安	○朝原（あさはら）	七八二～七九六	桓武
	○布勢（ふせ）	七九七～八〇六	桓武
	○大原（おおはら）	八〇六～八〇九	平城
	○仁子（よしこ）	八〇九～八二三	嵯峨
	○氏子（うじこ）	八二三～八二七	淳和
	○宜子（よしこ）＊	八二八～八三三	淳和
	○久子（ひさこ）	八三三～八五〇	仁明
	○晏子（やすこ）	八五〇～八五八	文徳
	○恬子（やすこ）	八五九～八七六	清和
	○識子（さとこ）	八七七～八八〇	陽成
	△掲子（ながこ）	八八二～八八四	陽成
	○繁子（しげこ）	八八四～八八七	光孝
	○元子（もとこ）＊	八八九～八九七	宇多
	○柔子（やすこ）	八九七～九三〇	醍醐
	○雅子（まさこ）	九三一～九三五	朱雀
	△斉子（きよこ）	九三六	朱雀
	○徽子（よしこ）＊	九三六～九四五	朱雀
	△英子（はなこ）	九四六	村上
	○悦子（よしこ）＊	九四七～九五四	村上
	○楽子（やすこ）	九五五～九六七	村上
	△輔子（すけこ）	九六八～九六九	冷泉
	○隆子（たかこ）	九六九～九七四	円融
	○規子（のりこ）	九七五～九八四	円融
	△済子（なりこ）＊	九八四～九八六	花山
	○恭子（たかこ）＊	九八六～一〇一〇	一条
	○当子（まさこ）	一〇一二～一〇一六	三条
	○嫥子（よしこ）＊	一〇一六～一〇三六	後一条
	○良子（ながこ）	一〇三六～一〇四五	後朱雀
	○嘉子（よしこ）	一〇四六～一〇五一	後冷泉
	○敬子（たかこ）＊	一〇五一～一〇六八	後冷泉
	○俊子（としこ）	一〇六九～一〇七二	後三条
	○淳子（あつこ）＊	一〇七三～一〇七七	白河
	○媞子（やすこ）	一〇七八～一〇八四	白河
	○善子（よしこ）	一〇八七～一一〇七	堀河
	○恂子（あいこ）	一一〇八～一一二三	鳥羽
	○守子（もりこ）＊	一一二三～一一四一	崇徳
	○妍子（よしこ）	一一四二～一一五〇	近衛
	○喜子（よしこ）	一一五一～一一五五	近衛
	△亮子（あきこ）	一一五六～一一五八	後白河
	○好子（よしこ）	一一五八～一一六五	二条
	△休子（のぶこ）	一一六五～一一六八	六条
	○惇子（あつこ）	一一六八～一一七二	高倉
	△功子（いさこ）	一一七七～一一七九	高倉
	○潔子（きよこ）	一一八五～一一九八	後鳥羽
鎌倉	○粛子（すみこ）	一一九九～一二一〇	土御門
	○熙子（ひろこ）	一二一五～一二二一	順徳
	○利子（としこ）	一二二六～一二三二	後堀河
	○昱子（てるこ）	一二三七～一二四二	四条
	△曦子（あきこ）	一二四四～一二四六	後嵯峨
	○愷子（やすこ）	一二六二～一二七二	亀山
	△弉子（まさこ）	一三〇六～一三〇八	後二条
南北朝	△懽子（よしこ）	一三三〇～一三三一	後醍醐
	△祥子（さちこ）	一三三三～？	後醍醐

西暦	歴史上のできごと
（六七二）	壬申の乱
（六七四）	大来皇女　大和の泊瀬から伊勢に向かう群行の確実な初例（日本書紀）
（六九四）	藤原京に遷都
（七〇一）	斎宮司が寮と同格になる　斎宮官制の初見（続日本紀）
（七〇八）	和同開珎鋳造
（七一〇）	平城京に遷都
（七一二）	古事記撰上
（七二〇）	日本書紀撰上
（七二八）	斎宮寮の拡充整備　官人の定員と官位が決まる（類聚三代格）
（七五二）	東大寺大仏開眼供養会
（七五九）	万葉集編纂
（七八四）	長岡京に遷都
（七九四）	平安京に遷都
（八〇五）	最澄帰国　比叡山に延暦寺建立
（八〇六）	空海帰国　高野山に金剛峰寺建立
（八二四）	多気の斎宮を度会の離宮（小俣町離宮院跡）に移す（類聚国史）
（八三九）	度会の斎宮（離宮院）の官舎百余棟焼失　斎宮を多気に戻す（続日本後紀）
（八九四）	遣唐使廃止
（九〇五）	古今和歌集撰上
（九一二）	斎宮寮の失火（扶桑略記）
（九一七）	延喜式完成　斎宮に関する細則も納められる（延喜式）
	この頃竹の都と呼ばれる（大和物語）
（九三五頃）	土佐日記
（九三八）	重明親王女　徽子女王群行（貞信公記）
（九七四）	斎宮　隆子女王疱瘡により斎宮寮にて死亡（日本紀略）
（九九五頃）	枕草子
（一〇〇〇頃）	源氏物語
（一〇一六）	道長が摂政となる　摂関政治
（一〇四〇）	斎宮歌合せ（類聚歌合）
（一〇八六）	白河上皇の院政始まる　摂政・関白無力化
（一一二三）	斎宮石名取り歌合（金葉集等）
（一一五六）	保元の乱
（一一五九）	平治の乱
（一一六七）	平清盛　太政大臣就任
（一一七二）	斎宮惇子内親王　斎宮寮にて病死（百錬抄）
（一一八五）	平家滅亡
（一一九二）	源頼朝　征夷大将軍　就任　鎌倉幕府開く
（一二二一）	承久の乱　朝廷の力衰退
（一二七四）	文永の役　元寇
（一二八一）	弘安の役　元寇
（一三二四）	正中の変
（一三三一）	元弘の変
（一三三三）	鎌倉幕府　滅亡
（一三三四）	建武の中興

参考　斎宮歴史博物館総合案内

平成18年度の 斎宮跡の発掘調査

第一四九次調査

史跡西部では平成十四年度から初期斎宮（飛鳥・奈良時代の斎宮）を確認するための調査を行っています。第一四九次調査は、多気郡明和町竹川字中垣内の近鉄線南側で調査を行いました。

平成十七年度までの調査で、弥生時代～中世までの遺構・遺物が数多く確認されました。なかでも第一四九次調査の西側で行った第一四六次調査の掘立柱塀は注目に値します。この付近は、史跡西部の台地上で最も高い場所にあたり、以前から初期斎宮の候補地として有力視されてきた場所です。そこで非常に立派な塀が見つかったので「初期斎宮、発見か？」と期待が高まりました。しかし、時期を限定する決め手が見つかりませんでした。

平成十八年度の調査では、弥生時代の方形周溝墓四基、古代の掘立柱建物三棟・竪穴住居一棟・土坑、中世頃の溝などを確認しました。主な出土遺物は弥生土器と古代の土師器・須恵器などです。

方形周溝墓とは周囲に溝を巡らせた四角い墓で、掘った土を内側に盛りあげて墳丘を造り、そこへ墓穴を掘って人を埋葬します。周りに掘られた溝の中からは弥生時代後期（今から約千八百年前）の壺や高杯が出土しました。

掘立柱建物は三棟とも調査区の西端で、竪穴住居・土坑は調査区の東側で見つかりました。古代の土師器や須恵器が出土しました。

また、北側の奈良古道から南へ延びてくる奈良時代の南北道路の延長線上も調査をしましたが、道路側溝は検出されませんでした。後世の削平とは考えにくいので、今回の調査区までは延びてこないことが確認できました。

他に、調査区東端で、東西方向の溝が1条見つかりました。幅二～三m、深さ一・一mの断面逆台形を呈する溝で、これまでの調査では発見されていません。非常に立派な溝ですが、土師器の小さな破片が二点しか出土しませんでした。

飛鳥・奈良時代の斎宮（初期斎宮）の場所や範囲を確認するための調査でしたが、その時期の遺構は非常に少なく、見つかった遺構も斎宮中枢部を構成するような性格のものとは考えられません。つまり、初期斎宮は今回の調査場所には無いということが明らかになりました。この五年間にわたる範囲確認調査やそれ以前の調査により、初期斎宮は今回の調査区よりも西側にある可能性が高いと考えられます。

斎宮歴史博物館
水橋　公恵

第149次調査　調査風景

第149次調査　現地説明会

斎宮跡　第一五〇次調査

全体で約一三七haもの広さをもつ史跡斎宮跡では、これまでの約三〇年の発掘調査により、その東半部に区画道路によって区切られた一辺およそ一二〇m四方の方形の区画を最大で東西七列、南北四列組み合わせた碁盤目のような地割（方格地割と呼んでいます）が平安時代の初め（九世紀初め）までには造営されていたことが、わかっています。そしてこの地割を基本に斎宮の宮殿や御殿が配置されていた様子は、斎宮歴史博物館の展示室の模型でも見ることができます。

第一五〇次調査は、この古代の壮大な都市計画ともいえる地割をつくる道路の交差点の部分を調査しました。区画を構成する要所を調査することで、地割の成立や変遷を調べようというものです。

今回の調査では、地割全体の東から二本目の道路と北から二本目の道路の交差点の大部分が確認されました。当時は道路の舗装などはされていませんので両側の側溝の存在で、それと知ることができます。ここでわかったことをいくつか整理してみますと・・・

・南北道路の幅は、側溝の肩と肩の間で一二mを超える幅がありました。

・南北道路の西側溝は東西道路の北側溝とぶつかって止まり、上からみると「T」字状になっていました。またこの西側側溝は平安時代の前期（九世紀前半）のうちには埋まって溝のはたらきをなしておらず、この時期には地割にも変化があったことが窺われます。

・南北道路の東側溝は、掘られた当初の姿をとどめておらず、平安時代の後期（十一世紀頃）まで何度も掘りなおされていました。南北道路は、この頃には当初の半分ほどの幅の道になっていたようです。

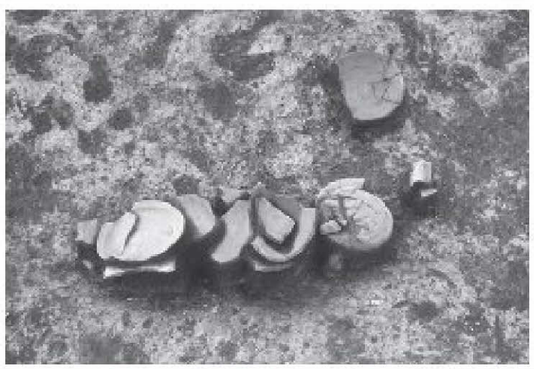
・南北道路の路面上に平安時代前期（九世紀前半）の土器を埋めた穴がありました（下写真）。お皿や壺など、形が残った状態で見つかっており、道路上にわざと埋められたもののようです。

・東西道路は北側溝だけ見つかりましたが、南北道路の側溝のように途切れず、交差点をぶち抜いて通っています。地割全体の東への排水を優先しているものと考えられます。

このように第一五〇次調査では、建物などは見つかっていませんが、平安時代を通して、斎宮が最盛期を迎え、その後変容していく様子をかいま見るものとなりました。

斎宮歴史博物館
大川　勝宏

第150次調査　全景（西から）


第150次調査　路面に埋められた土器

悠かなる歴史の風 いま 吹きわたる

―斎王まつり実行委員会―

写真提供　桜井市観光課

二上山と御霊神社

斎王まつり実行委員会は、第二十五回斎王まつりの成功と、パンフレット作成のための取材研修として、平成十九年一月二十一日に、二上山登山と五條市霊神社へ行ってきた。

二上山と言えば、山頂に、天武天皇の子で謀反の疑いをかけられ、自害させられた大津皇子の墓がある事で知られている。

また、初代斎王であり、大津皇子の姉である大来皇女が詠んだ、

「現身の　人なるわれや　明日よりは
二上山を　弟世とわが見む」

という、歌でも知られているだろう。

今回は、実行委員二十六名が参加し、大阪府太子町側から二上山を登る事とした。

足の調子の悪い人もいたので、全員の登頂はならなかったが、片道一時間の行程は、なかなか情景の変化に富んでいて面白く、興味深いものであった。

途中には、岩屋の千年杉（根周り約8メートル・樹齢約六百年・平成十年九月の台風で倒れ、一部が残っているもの）があったり、明日香や大阪の町並みを眺めたり、楽しく心地良い汗をかく登山であった。

大津皇子の墓がなぜ二上山にあるのか、諸説は色々あると思うが、明日村など、当時の都が一望出来たからなのではないだろうか？

悲劇の物語と、古代の浪漫のある、二上山であった。

五條市御霊神社は、井上内親王、早良親王、他戸親王を祀っている。

五條市の辺りは、藤原南家ゆかりの地であり、江戸時代にはここを通行する者は、大名といえども馬から下りて通る習わしがあり、それを犯すと、落馬するか禍いを受けると伝えられている。

それもこれも、井上内親王の幽居があったからで、その跡には井上院が建立されて、現在井上町という自治会があり、「聖神さん」と呼ぶ、古い祠を祀り、境内で子供がふざけておしっこを漏らしても、祟りは無いが、大人が放尿でもしようものなら、病魔に侵されてしまうと言われているらしい。

御霊神社は、各地にいくつもあるが、古の頃からの権力争いなどによる怨み、呪い等を静めるためのものらしい。

そのことを思い静かに手を合わせ、帰路に着いたのであった。

企画委員長　岩佐　康則

二上山を尋ねて

駐車場を後に、総勢二十四名で二上山へと向かった。二上山は葛城連峰に続く標高五一七米の雄岳と四七四米の雌岳が寄り添う様に並び、奈良方面から眺めるとラクダの背の様に見える山で有る。特に二上山に沈む夕日の美しさは、昔から西方浄土の入口として神聖視されてきたらしい。

私達一行は、謀反の罪を受け非業の死を遂げた大津皇子の墓が有る雄岳頂上を目ざした。

登山道で行き交う人々は、リュックを背に杖を持った人、幼い子どもの手を引いた母親など様々で、家族連れで楽しめるハイキングコースとなっている。整備された坂道を喘ぎながら辿り着いた古代池では、大寒と言うのに数匹の錦鯉が優美な姿で私達を出迎えてくれた。元気に泳ぐ鯉を眺めながらほっと一息。

腰を伸ばし、両手を天にかざしながら、石切場跡へ辿り着く。全員揃って記念写真に収まる。

わが背子と　詠みし大伯を　偲びつつ
尋ねし御山は　はるか彼方に　　久子

石切場跡から更に坂道は続く。木もれ日を浴びながら、右手に岩屋跡と記された標示を見る。左眼下には当麻の町並みが墨絵の様に浮かんでいた。

事務局　野畑　久子

怨霊伝説

歴代の斎王ゆかりの地を巡る研修旅行、今回は、大阪府太子町と奈良県当麻町にまたがる二上山と奈良県五條市の御霊神社を訪ねました。

二上山は、五一五ｍの雄岳、四七四ｍの雌岳からなるラクダのこぶのような形をした山で、雄岳山頂には、皇位継承争いの陰謀により謀反の嫌疑で処刑された大来皇女の弟、大津皇子の墓があります。また、登山道が整備され、家族連れ等たくさんの人達がハイキングを楽しんでいます。私たちも息勾配の長い長い坂道を、休み休み山頂を目指して登山を楽しみました。そして、大津皇子の墓をお参りし、心地よい達成感を感じることができました。

御霊神社は、時の権力者の陰謀（皇位継承争い）により非業の死を遂げた井上内親王と他戸親王親子の霊を弔うために桓武天皇の勅願によって創祀された神社です。現在の本殿は、一六三七年に建てられ、流造檜皮葺三間社で、奈良県指定文化財となっていますが、本殿の檜皮葺の屋根に網が掛けられていて、しっかり見えなかったのが残念でした。

御霊神社に祀られている、怨霊伝説で有名な井上内親王。波乱万丈な人生を探ってみました。

井上（いのえ・いがみ）内親王（七一七～七七五）

聖武天皇の皇女、母は県犬養広刀自、同母妹に不破内親王、同母弟に安積親王がいる。七二二年、五歳の時に伊勢斎王に卜定され、六年後に伊勢へ下向。

七四四年、弟の安積親王の急死により伊勢斎宮を退下。

帰京後、白壁王の妃となり、酒人皇女、他戸皇子を出産。

称徳天皇崩御の後、天智天皇の孫である白壁王が皇位に就き、光仁天皇となり、皇后となる。

七七二年、巫蠱大逆（巫女に天皇を呪い殺す祈祷をさせる、マシワザ（人形）を御井に投げ入れる）の冤罪をきせられて、皇后の位を剥奪され、皇太子となっていた他戸親王も母に連座して皇太子の位を剥奪された。背後には山部親王（後の桓武天皇）擁立を謀る藤原式家の策略があった。（当時、政権は完全に藤原氏の手中にあった。）

七七三年、難波内親王（光仁天皇の姉妹）を呪詛した罪で、大和国宇智郡の没官の宅に　息子の他戸王と共に幽閉され、その後七七五年、幽閉先で母子共に変死した。

井上内親王母子が難波内親王を呪詛する理由が見あたらず、これまた藤原式家、山部親　王らの謀略に陥れられたとしか理解できない。

その後、都では、瓦・石・土くれが家々の屋根に毎夜（二十日余り続いたらしい）降り　積もったり、雨が降らずに川、井戸が涸れたり、天災地変がしきりに起こった。また、光仁天皇や藤原百川が悪夢に悩まされたりもした。これは全て、井上内親王、他戸王の　怨霊と恐れられ、御霊を鎮める祈祷がおこなわれた。

光仁天皇は、井上内親王の遺骨を改葬させ、墓を御墓と追称した。また、内親王を皇后　と追号し、御墓を山陵と追称し、その後、霊安寺御霊神社に祀られた。

幼くして神に仕え、俗世から隔絶された静かな前半生を過ごして来た内親王は、権力争いに立ち向かっていくような逞しさを持ち合わせた女性ではなく、死後、怨霊と化して憎き藤原氏を祟ることしかできない、弱い女性だったのではないかと思います。

時の権力者の都合で神に捧げられ、またまた権力者の都合で俗界どころか地獄の底まで引きずり降ろされた不幸な人生を送った女性。当時の内親王の人生とはそういうものだったのでしょうか。

何はともあれ、今年の斎王まつりの成功を御霊神社に祈願しました。きっと井上内親王がやさしく見守ってくれるでしょう。

まつり実施委員長　笛川　浩

他戸親王墓

井上内親王墓

万葉人へのいざない

歴史をひもとく大和路へ久しぶりに訪ねる。

二上山を背後に當麻寺（現葛城市當麻町）付近を数年前に桜、ボタンの鑑賞に度々訪ね、二十数年まえには二上山に登り雄岳の大津皇子陵墓を訪れたことがあったが、今ほど伊勢斎宮の歴史にかかわっていることを認識していなかった。

以前は二上山へは二上山神社口から登ったり、祐泉寺口から登った記憶があった。

今回は當麻寺への古来から往来の盛んな竹内街道口より、初めて登ってみた、雌岳の頂上は石造りの日時計や三角点が綺麗に整備されていた。

二上山雄岳絶壁には今回尋ねる目的、大津皇子の墓がある。

墓は経数十メートルの小規模な円墳？であった。

大津皇子は天皇の御子であり、皇位継承をめぐって政争の悲劇の主人公でもある。

大津皇子は風貌大きく威儀高いとし学才もたかかったと伝えられている。

政争のなかに処刑されたのち、大津皇子の姉君の大伯皇女が『万葉集』に

大津皇子の屍［しかばね］を葛城の二上山に移し葬るときの哀悲して詠んだ和歌に

和歌

うつそみの人なるや吾や明日よりは二上山を弟背と吾が見む　とある。

また、大伯皇女は大津皇子が伊勢の地の斎宮［いつきのみや］よりの上り下りに詠んだ歌二首がある。

わが背子を　大和へやると　さ夜ふけて
　暁露に　わが立ちぬれし

二人行けど　行き過ぎがたき　秋山を
　いかにか君が　ひとり越ゆらむ

この二首は決別のなごり、皇子の後姿を見送りつつ詠んだ皇子の安息を祈る歌であろう

大津皇子の墓、二上山をくだり再び竹内街道に帰る。

この竹内街道はわが国最古の官道であると言われている（初瀬街道）ともいわれ、大和の国から河内の国、両国を結ぶ重要な古来の産業道路でもあった。

この竹内街道から次の訪問地、五條市へとパスはひた走る。五條市には御霊神社が建立されている。

御霊神社とは

御祭神は光仁天皇皇后で聖武天皇皇女の井上内親王である。

井上皇女は奈良時代、大仏建立などの大事業を進めた聖武天皇の長女として、七一七年に生まれ、七二一年五歳の時、卜定（ぼくじょう、占い）により、斎王に選ばれ七二七年十一歳で斎宮に出仕し十九年間程斎王として斎宮の地で奉仕して過ごした。

七四六年内親王三十歳で任を解かれ平城京へ戻り数年後白壁王の妃となられた。

斎王制度は大来皇女から、井上皇女へとつながり、斎宮寮や斎王制度を発展、確立されていった。

御霊神社は奈良時代末期に混乱と都に天変地変が相次ぎ、悪疫が流行したため、時の光仁天皇はたたりを恐れて霊を慰められるため、各地の墳墓を改葬し御墓と称した。八〇〇年頃には御霊神社が各地に建立されていった。現在五條市内には祭祀される御霊神社は二十社ほどある。

前述の光仁天皇、井上内親王を語ると外せないのが酒人親王である。

酒人親王は光仁天皇と井上内親王の皇女であり、のちの桓武天皇の妃、同母弟には、他戸親王がいて、叔母に不破内親王がいる。宝亀元年（七七〇年）、光仁天皇が即位したため、酒人内親王は十九歳で伊勢の斎王に卜定される。伊勢への下向の前に、潔斎のためしばらくこもる野宮として春日斎宮に住まう。

やがて潔斎を終えて宝亀五年（七七四年）伊勢の斎宮に下向する。

宝亀六年四月に井上内親王と他戸親王の幽閉先での急死により、斎王を退下する。帰京後は、異母兄の山部親王（桓武天皇）のお妃になった。

酒人内親王は宝亀十年（七七七年）に朝原内親王を産む。やがて朝原内親王も斎王になることになり、祖母、母、妹と実に三代にわたる斎王となった。

同親王は天長六年（八二九年）八月、実に8代の天皇の御世を生きて、七十六歳で亡くなった。政争に翻弄された波乱の生涯であった。

また、酒人内親王は美貌の斎王であったと伝えられている。斎王に卜定されるまでは豊かな髪を高々と宝髪に結い上げられ、あまりの艶やかさに御髪は御仏の瑠璃のひかりと崇められていた。

このように各代の斎王をひとりひとり調べ書き記すことの一層の興味と歴史の重さを追い求めたい。

大和路は訪ねる程に歴史が深く、大化改新以後、各地に天皇の墓が散在しているので歴史を紐解く機会を今後も多く持ちたい。

群行班　中川　裕正

大津皇子と二上山

大津皇子は天武天皇の第三王子で、母は太田皇女。大伯皇女は姉であることは皆様ご承知のことである。

二上山は金剛生駒紀泉国定公園に属し、大和の国と和泉の国境にある五一七ｍの雄岳と四七四．二ｍの雌岳からなる。「ふたかみやま」、または「にじょうざん」と呼ばれているが、最近は「にじょうざん」と呼ばれることが多い。太古に噴火を起こした火山で石器の材料であるサヌカイトが凝灰岩とともに産出し、飛鳥高松塚古墳などの石槨を取り出した石切場がある。

大伯皇女の歌、「わが背子を大和へ遣ると小夜更けてあかとき露に我が立ちぬれし」の思いを胸に斎宮を出発した。

天智天皇が没した六七二年、大海人皇子は兄天智天皇の子大友皇子を討つべく壬申の乱を起こし勝利した。大津皇子は半ば人質として大津の宮に残っていたが大津宮を脱出し朝明郡（菰野町）で再会している。その後大海人皇子は飛鳥浄御原宮で天武天皇として即位した。

天武天皇は六人の皇子（高市皇子、草壁皇子、大津皇子、忍壁皇子、川島皇子、芝基（磯城）皇子）、皇后の鵜野讃良皇女（持統天皇）らを伴い壬申の乱を旗揚げした吉野へ行幸し、皇子等に「後継の争いはせず兄弟力を合わせ世を治めよ」、また皇子たちを抱きしめ「母は違うがみな同じ母から生まれたも同様に愛しい」と皇位継承のための争いを起こさせないよう后とともに約束させた。

大津皇子は六八六年十月天武天皇が崩御すると川島皇子（天智天皇の子）の密告により謀反の嫌いで捕らえられ、翌日処刑された。皇子は武勇、学問に優れ父天武天皇、側近はもとより伯父の天智天皇にも愛されていた。

謀反の罪として大津皇子のみが処刑され側近は許されている、皇后鵜野讃良が実子草壁皇子の皇位継承のために謀ったと言われるのはこのことからと思われる。

辞世の歌として、「百傳　磐余池尓　鳴鴨乎　今日耳見哉　雲隠去牟」（ももづたふ磐余の池に鳴く鴨を今日のみ見てや雲隠りなむ）

訳「磐余の池に鳴く鴨を見るのはことは今日までか、私は死んでいくのであろうな」が万葉集にある。

また日本最古の漢詩集「懐風藻」に

金鳥臨西舎（太陽が西に沈むとき）鼓声催短命（時を告げる太鼓の音が短命を催す）

泉路無賓主（死出の旅に客はいない）此夕離家向（夕刻に家を出てどこに向かうのか）

辞世の漢詩が収められている。

大津皇子は二上山に葬られ。斎宮の任を解かれ都に戻っていた姉大伯皇女は弟を偲び「うつそみの人なる我や明日よりは二上山を弟と我が見む」と歌った。

吉野での誓いは何であったのだろうか。父は兄の子を滅ぼし、我が子は継母に処される骨肉の争いは、次に訪れた御霊神社に祀られる井上内親王、他戸親王母子も同じ運命だったといえる。

母の情愛が姉弟の絆を断ったのか、大伯の斎宮での別れの歌、大津の辞世の歌、残された姉としての大伯の歌に込められた姉弟の心を思い山上の墓に頭を垂れた。

追記

もう一つの大津皇子の墓

二上山を近鉄二上神社口駅からの登山道近くに鳥谷口古墳がある。二十数年前に発見され、七世紀末に築造されたと推測されること、急ぎ造られたものであることから大津皇子の墓ではないかと、山上の墓の真偽が論じられた。皇子とはいえ謀反の罪で死罪となった者が山上に埋葬されるのも疑問が残る。山上の墓は後日改葬され祀られたのではないかと思いたい。

企画班　橋本　久雄

権力の継承と斎王

七から八世紀、日本の政治権力の継承には決まったかたちがなかった。六世紀から七世紀にかけての蘇我氏。大化改新以後の天皇親政、そこから派生してきた藤原各氏の政権争奪の激しい波は、天武帝時代に確立した斎王（伊勢神宮）制度にも、当然の事ながら大きな影響を与えている。

今回私たちが訪れた大津皇子墓、井上内親王（皇后）陵、他戸親王（皇太子）墓は、政治権力争いに飲み込まれた人々の、慟哭と怨嗟の歴史遺産でもある。大津皇子については他の委員の記述も多いだろうから、私は井上内親王、そしてその娘酒人内親王、さらには孫娘朝原内親王と、三代にわたって斎王としてこの地（斎宮）に斎王として生きた女性たちにについて書いてみようと思う。

葛城市農林商工課資料提供

時代は天平十六（七四四）年。井上内親王が弟安積親王の突然の死を契機に斎王の任を解かれ大和の都へ帰ってきた。百年ほど前の大伯斎王と同じように、井上内親王もまた、弟の訃報を斎宮で聞いたのだった。齢は二十八になっていた。五歳で斎王に卜定され、十一歳から十七年間を斎宮で過ごしている。

内親王は時の皇太子首皇子（のちの聖武天皇）と県犬養広刀自の間に生まれた。聖武天皇は持統天皇の孫。文武天皇と藤原不比等の娘宮子との間に生まれ、不比等と県犬養（橘）三千代との間に生まれた安宿媛（のちの光明皇后）をも妻にしている。井上内

親王は天皇の娘という高貴な出自ではあるけれど、母が藤原氏でなかったので、皇位継承という面ではどちらかといえば、藤原全盛の時代にあっては不遇な立場にあった。

井上斎王が斎宮にいる間には、じつにいろいろな事件が起こっている。六年の潔斎を経て斎宮に下向した神亀四（七二七）年、聖武天皇と安宿媛との間に皇子（基王）が生まれ皇太子とした。しかし翌年薨去。翌七二九年長屋王自尽。光明子立后。天平九（七三七）年長屋王以後、権勢を誇示していた不比等の子四人があいついで亡くなる。聖武天皇は七四〇年から伊勢、美濃、難波、近江などへ行幸や遷都をくり返している。その途中に井上内親王の弟安積親王が急逝した。この時の権力は呉犬養三千代の息子で光明皇后の異父兄の橘諸兄が握っていたが、安積親王の死には若き日の藤原仲麻呂が関係しているとの説もある。

都に戻った井上内親王は天智天皇の第七皇子、志貴皇子（のち白壁王）の后となったが、そのときはまだこの皇子が天皇につくとは誰も予想していなかった。その後、大仏鋳造、開眼供養、唐僧鑑真来京等を経て、聖武天皇から孝謙（阿倍内親王）、淳仁と、皇位継承は揺れに揺れ、天平宝字八（七六四）年には淳仁帝と結んだ藤原仲麻呂は乱を起こしたが平定され、孝謙帝が再祚して称徳帝となった。

その称徳帝が神護景雲四（七七〇）年崩御すると、度重なる政変、粛清で後継の候補者たちがほとんどいなくなっていた。そこで白壁王が推挙され、六十一歳で光仁天皇として即位した。天武系皇族の最後の一人であった井上内親王は五十三歳となっていたが皇后に立てられ、その子他戸親王は皇太子となったのだ。望むと望まないにかかわらず、彼女は政争の真ただ中に立っていた。

はたして宝亀三（七七二）年、立后から一年と少しの間に、巫蠱の罪をきせられ廃后。他戸皇太子も廃され、宝亀八（七七五）年幽閉先の大和国宇智郡で変死させられたのだ。この廃后、廃太子と二人の同時死の背後には、藤原式家と、のちに桓武天皇となった山部親王が何らかの関わりを持っていることが推察される。

さらに井上皇后と他戸皇太子が罪を着せられた約半年の後、娘酒人内親王が斎王に卜定。宝亀五（七七四）年斎宮へ赴き、翌年母と弟の急死により斎王を退下。帰京後、あの異母兄山部親王（のちの桓武天皇）の妃となるのだ。

その後桓武との間に出来た朝原内親王も斎王に卜定され、延暦四（七八五）年七歳で平城京から斎宮に下向している。桓武帝はこの内親王がよほど可愛かったらしく、遷都していた長岡京から平城京まで出向き、娘を見送っている。朝原内親王は身内の不幸がなかったにもかかわらず、延暦一五（七九六）年斎王解任。平安京に移った都に帰京して、その後異父兄安殿親王（のちの平城天皇）の妃となった。まるで結婚のための解任のようであった。

朝原内親王は弘仁八（八一七）年三十九歳で亡くなる。その間大同五（八一〇）年、譲位した夫、平城上皇と嵯峨天皇の間に激し権力争いも起きている（薬子の変）。酒人内親王はこの後天長六（八二九）年、七十六歳まで生きた。万燈会を東大寺で度々催し、母井上内親王と弟他戸親王を弔ったという。

井上（約十七年）、酒人（約七ヶ月）、朝原（約十一年）と三代にわたり血脈をつないだ皇女は、この地斎宮で斎王としてすごした。それは都からはるか離れた、うまし国伊勢での、ゆったりとした神々との日々であったろう。しかし大伯内親王と大津皇子の時からそうであったように、時の政治権力は神の国をも抗争に巻き込まずにはいない。この三人の内親王は神意によってか、卜定され、人意によって解任された。都へ帰ってともに天皇の妃となって、悲惨な出来事に出会うわけだが、それも、この時天皇家の血筋に生まれた者たちの宿命ともいえる。

井上内親王は死後怨霊の祟りとして畏れられ、遺骨を改葬。現在御霊神社にその御霊が祀られているが、その神社は坂の上に建ち、しっかりと御陵の方角に向かって祈りをささげながら、何かを封じ込めているように見えた。

また井上内親王の御陵に比べて他戸皇太子のそれは幾分簡単にすぎるように見えたのは、女と男の怨霊に質の違いがあるからなのか。いや、ただ単に台風かなにかで、皇太子陵の御木が折れてしまっているだけなのかもしれない。

前夜祭班　東谷　泰明

悠かなる斎王たち
堺祭の（天来・井上・酒人）と朝原

今回、二上山と御霊神社を訪れるにあたり、四人の斎王たちに思いをはせた。

大来・井上・酒人・朝原斎王である。

大来斎王は弟の大津皇子の死によって斎王解任となった。権力争いの犠牲となった井上斎王も弟の安積親王の突然の死によって解任されている。都に帰り白壁王の皇后となったが、宇智（五條市）に酒人の弟である他戸親王とともに幽閉され廃后・廃太子となり数年後に不審な同日死で亡くなった悲劇の斎王として知られている。井上・酒人・朝原は親子三代にわたり斎王となった。

斎王が辞任することを退下という。

何事もなく平穏に譲位した場合は行きの群行路を帰ってもよかったが、多くの場合が凶事であった。

天皇崩御、母の喪、肉親刑死、事故などの凶事の場合は伊賀道を通り大和、山城、難波を経て入洛した。朝原を除く三人の斎王たちの退下は凶事の道である。

いずれの場合も帰る時にも何度も禊を繰り返しながら戻ったという。伊勢路への群行で五泊六日だが、伊賀道は九泊十日程かかる。阿保頓宮のある阿保は斎王退下のとき、堺祭という重要な儀式を行う場所でもあった。

青山峠で、斎王はそれまで着ていた白い着物を脱いで普通の女性の着物に着替える。脱いだ着物は青谷に捨てられた。

青山峠の谷底へ斎王の着ていた白い十二単が、ふわりふわふわと、白い鳥のように落ちていく様子を斎王たちは、どのような気持ちで眺めていたのだろう。

大来斎王は弟を思い、井上斎王は弟や権力抗争の渦を思い、酒人は母の井上や弟の他戸親王を思っていたに違いない。

輿は主神主に、御衣は忌部に、その他のものや、辛櫃は谷に捨てたという。

大来斎王は十二歳で斎王に決まり十三歳で群行し約十二年間の間、神に仕えた。大来斎王二十五歳での堺祭である。

井上斎王は五歳で卜定し、十一歳から約二十年間、神の御杖代となった。（正確な年月は不明）

井上斎王三十歳前後の堺祭である。

酒人斎王は二十歳のとき斎王となり、約七ヶ月の在任であったが、母の井上と弟を亡くした心の傷は大きかったであろう。二十一歳の堺祭である。

青山峠の深い谷を見つめながら聖から俗へ、現人神から汚れなき娘へと、これから生きる自分を見つめていた。

崖に咲く紫式部の花が峠の悠かな風に吹かれ揺れていた。

朝原斎王は身内の凶事はなかったが解任され、都に帰り後の平城天皇と結婚している。

大淀の業平松の由来にもなった在原業平は平城天皇と朝原の孫にあたる。

斎王解任後の皇女たちは、前を向き凛として激動の時代を懸命に生きぬいていった。

企画班長　八田　明美

二上山に登り、時代の流れを考える

万葉集で大津皇子の悲劇にまつわる山として知られる二上山に向かった。二上山は、大阪（太子町）と奈良（当麻町）にまたがる「雌岳（五一七m）」「雄岳（四七四m）」の丸い二つ峰を連ねる。その姿は、三重県で生まれ育った私にとっては、二見の「夫婦岩」を髣髴させる。この雄岳の山頂には、現在、宮内庁にて管理されている大津皇子の墓がある。大津皇子の姉であり、斎宮制度が確立されてからの初代斎王として斎宮に下向した大来皇女も、この二上山に葬られている。彼らの墓への参拝のため、山頂を目指した。

当日の天候は、薄曇ではあるものの、その頂から眼下を見渡すと実に美しい景色・絶景が広がる。そこには、もちろん山々に囲まれ自然豊かな木々がたくさん生息している。その一方で、遠方には山を開拓して、人工的に開発された町並みも見える。夜は、きっとその町のあらゆる所でライトアップされ、その光がきれいなイルミネーションとなるのだろう。昼間の自然豊かな姿が一転して、夜には夜景が輝くのであろうと感じた。

かつて、大津皇子や初代斎王である大来皇女もここから風景を楽しんだのであろうか。当時は、今私が眺めた町並みは無く、もっと遠った趣の風景を醸し出していたのであろう。時代の流れと共に、この風景も少しずつ姿を変えて行く。このようなことを考えながら、改めて時の流れを感じ、自分自身がその中の一時を歩んでいることを認識させられる。

今から一三〇〇年以上もの昔を生きた大来皇女を始めとして歴代の斎王は、未来の変わり行く暮らしぶり、今の私たちの暮らしぶりへの変貌を想像できたのであろうか。そして、自身に自問してみる。千年先の未来にどのような姿の日本があるのか。どのような世界があるのか。今の私には、全く想像ができない。

時代が変わり行く中で、何か不変のものはないのだろうかと考えてみた。その一つに夜空がある。夜、天を見上げるときれいな星空が輝いている。この星空は、数千年も昔から変わっていない。私たちが毎晩見つめるこの星空をかつての斎王たちも見つめてきたのであろう。きっと、星空をながめながら人々の平和を祈ってきたのであろう。

群行班長　早川　潤一

ちょっとお休み

時代の波のなかで懸命に生きる

皇位継承ゆえの祟りや呪いへ恐れは人々の心の中に生きていた。

持統天皇も例外ではなかった。

大津太子が亡くなってから三年後に、持統天皇の実子である草壁皇子が急逝した。次の天皇になるはずであった草壁皇子の突然の死は、持統天皇に大津皇子の祟りと恐れさせたのであろう。大津皇子の再葬を行っている。六九三年に持統天皇は草壁皇子の子である軽皇子を文武天皇として即位させたが、二十五歳の若さで崩御された。謀反の罪で自害させられた大津皇子の祟りだと、人々に恐れられた。薬師寺に大津皇子を祭神とする若宮社がある。

五條市御霊神社も恒武天皇により創祀され光仁天皇は遺骨を再葬し御陵とした。恒武天皇の皇后、酒人は東大寺万燈会を開催するなど母、井上と弟、他戸親王を弔っていた。

八田　明美

杖もって笑顔

空気がおいしい

図書の紹介

私達の「斎宮」について より多くのことを知っていただくために
―地元で読める斎宮関係図書のご紹介―

凡例
◎ふるさと会館（図書館）で貸出可　○ふるさと会館（図書館）で閲覧可
☆いつきのみや歴史体験館・博物館ミュージアムショップで販売
◇斎宮歴史博物館図書ホールで閲覧可

「斎宮」の入門書として	谷口布有絵文　里中満智子画『斎王ロマン　都わすれの詩』明和町◎☆ 中野イツ著『斎宮物語』明和町◎☆ 山川修司著『語り部の竹の斎王話り』近代文芸社◎☆◇ 榎村寛之著『伊勢斎宮と斎王』塙書房☆
郷土の歴史として「斎宮」を知りたい方に	奥井宏忠著『別れの御櫛―斎の宮と斎宮寮』光書房○◇ 明和町教育委員会編『郷土史に見る斎王』◎◇ 三重の文化財と自然を守る会編『伊勢斎王宮の歴史と保存』○◇ 『同Ⅱ』◇
斎王一行の旅した「群行」の道を歩いてみたい方に	田畑美穂著『斎王のみち―伊勢斎宮の文化史―』中日新聞本社○◇ 村井康彦監修『斎王の道』向陽書房◎☆◇
「斎王」を小説で読んでみたい方に	内田康夫著『斎王の葬列』角川書店◎◇ 池田美由喜著『鷺草―大津皇子とその姉と―』新風舎◇ 郡俊子著『倭姫宮の御巡行』勢陽文芸◎◇ 〃　『伊勢斎王の恋』近代文芸社◎◇ 〃　『哀しみの伊勢大来斎王』近代文芸社◎◇
「斎宮」や「斎王」について考えてみたい方に	津田由伎子著『斎王』学生社○◇ 山中智恵子著『斎宮女御徽子女王―歌と生涯―』大和書房◎◇ 〃　『斎宮志』大和書房◎◇ 〃　『続斎宮志』砂子屋書房◎◇ 〃　『斎宮創記』砂子屋書房◎◇ 所京子著『斎王和歌文学の史的研究』国書刊行会◇ 〃　『斎王の歴史と文学』国書刊行会◇ 榎村寛之著『律令天皇制祭祀の研究』塙書房◇ 中川　梵著『斎宮和歌の解釈と鑑賞』紫明の会☆ 服藤早苗著『歴史のなかの皇女たち』小学館☆

第25回（平成19年度）斎王まつり実行委員会組織体制

役職名	
本部	代表 森下　清　実施委員長 笛川　浩　総務財務委員長 田中　貢　企画委員長 岩佐康則　事務局 野畑久子
会計監事	西口岩男　渡辺幸宏
顧問	名誉会長（町長）中井幸充 西場信行　大野秀郎　花井　勝　森島啓之　中出和之　辻　丈昭　山川充造 吉田いと　中野イツ
相談役	辻　孝雄　朝倉惟夫　北村純一　橋本久雄　東谷泰明　森島啓之　小林邦久

小委員会名	任務分担の内容	構成する委員の氏名		
総務班	総務実施計画と実施 グッズ販売・スタンプラリー等	◎竹内克巳	○山路雅敏　浅尾　徹　石田豊喜　辻　孝雄　中嶺正実 原野正之　三谷　誠　山内聖人	9
財務班	財務実施計画と実行	◎大西俊次郎	西村直克	2
祓班	祓の儀の実施 （祓の儀での群行を含む）	◎森田　均	○西山浩一　岸　幸平　奥山憲生　川井秀次　北村純一 北山房夫　森島啓之	8
群行班	出発式の実施 群行の実施 社頭の儀の実施	◎早川満一	○中川裕正　○中村好富　朝倉惟夫　石田康生　亀村定雄 田中真司　西村　帝　八田秀穂　森島朝美　山本佐七	11
会場班	着付会場内の管理（写真手配等） 出演者の移動	◎土井祐治	○北川和樹　澤　和弘　澤　恒一　田端幸男　西岡吉一 西岡信行　森谷伯子	8
着付班	着付準備と後片付け	◎西川道子	○新田一子　田中政子　大山静子　清水清子　澄野たい子 夏井ちはる　西川美代子　西宮幸代　服部益子　奥野英子 新谷千恵子　安井澄代　植田芳子　高柳勝子　高橋利香 今西明美　樫本英子　西山和絵　山路純子　金谷典香 青木典子　竹内千祥	23
アトラク・前夜祭班	アトラクションの実施 前夜祭の実施 ステージの企画実施	◎伊申金市	○東谷泰明　○北岡　泰　○関岡武夫　○中西修一　小倉斎信 北村哲也　小林邦久　佐々木久夫　三田鉄郎　田端利也 永島せい子　森茉津子　長谷川新　岡宮一彦　森西捨巳	16
企画班	まつりの全体企画 ポスター・パンフレット原案作成 広報・宣伝事業計画	◎八田明美	○小林順一　○西山清美　○橋本久雄　○森田ゆかり	5

敬称略・順不同（◎班長　○副班長）　平成19年4月1日現在

中学生ボランティアと準備作業

群配布

かつらあわせ（艶の探り）

準備作業（竹切り）

準備作業（のぼり立て）

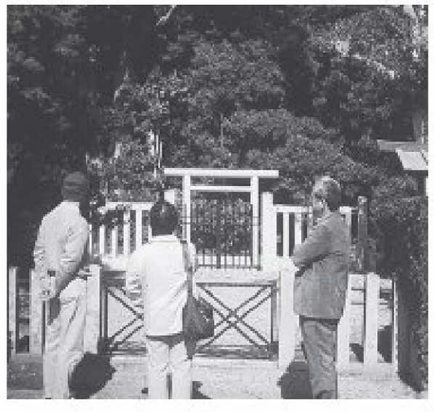
櫛まつり

出演者撮影　ハイチーズ

第24回（平成18年度）斎王まつり実行委員会活動

9月	1日(木)	臨時総会
	8日(木)	新役員挨拶(役場他)
	10日(木)	第1回総合企画会議
	13日(火)	斎宮放送まつり協賛
	18日(日)	いつきのみや観月会協力
	22日(木)	第2回総合企画会議
10月	7日(金)	役員会議
	13日(木)	いつきのみや体験所写真展示 第3回総合企画会議
	20日(木)	印刷業者説明会・企画班会議
	22日(土)	斎宮放送まつり協力
	27日(木)	第4回総合企画会議
11月	7日(月)	印刷業者ポスター締切
	8日(火)	アトラク斎王市班・前夜祭班会議
	9日(水)	群行班・祓班会議
	10日(木)	第5回総合企画会議
	11日(金)	いつきのみや体験所写真撤去 着付班会議
	15日(火)	総務班会議 企画班会議（子巻印刷と打合せ）
	18日(金)	文化祭写真等飾り付け
	19日(土)	町文化祭
	20日(日)	古道まつり協力
	22日(火)	ポチ博用意
	23日(水)	ポチ博協力
12月	8日(木)	第6回総合企画会議
	15日(木)	梅まつり会議
1月	19日(木)	総合企画会議・会計監査
	20日(金)	ポスター納品
	22日(日)	パンフレット取材研修・懇親会
	29日(日)	第24回斎王まつり総会(研修室)
2月	14日(火)	童・童女応募締切
	16日(木)	総合企画会議
	25日(土)	出演者応募締め切り
	26日(日)	童・童女・近侍・舞人出演者説明会(いつきのみや体験所)
3月	2日(木)	役員会
	5日(日)	梅まつり協力(斎宮歴史博物館)
	9日(木)	アトラク班会議
	13日(月)	リーフレット校正
	15日(水)	着付・祓・群行合同班会議
	19日(日)	斎王役選考会(いつきのみや体験館)
	20日(月)	協賛金締切　リーフレット校正完了(協賛金確定)
	22日(水)	アトラク出演者スケジュール(案)作成
4月	5日(水)	アトラク出演者会議
	7日(金)	総合企画会議
	11日(火)	企画班パンフレット最終校正
	12日(水)	斎王市出展者会議
	17日(月)	祓班・群行班合同会議
	19日(水)	企画班会議　※奥學館訪問
	20日(木)	総合企画会議　※町内自治会長へのお願い
	23日(日)	明星自治会長会議出席　※マスコミ資料配布
	26日(水)	県知事表敬訪問・総合企画会議　※警察、消防への申請
	28日(金)	全体会議
	29日(土)	倉庫点検　現場確認　柱製作
5月	6日(土)	大淀・上御糸自治会長会議出席
	7日(日)	イオンジャスコ明和開店記念イベントへ斎王・直衣役出演 看板製作　柱製作続き　舞台板のペンキ塗り
	8日(月)	下御糸自治会長会議出席
	10日(水)	群行・祓・着付班会議
	12日(金)	近畿町訪問
	13日(土)	安濃郡会出席
	14日(日)	群行配役関係説明　竹切り　頭巾着鮮体 斎宮自治会長会議出席
	17日(水)	アトラクション出演者最終会議
	18日(木)	総合企画会議
	21日(日)	のぼりたて　看板点検見直し　ステージ作り　草刈
	24日(水)	斎王市出展者最終説明会
	28日(日)	最終全体会議　ステージ作り
	29日(月)	役場ボランティア説明会議 ※弁当等の発注 ※使用備品数の確認
6月	1日(木)	最終打合せ(当日の役割分担確認)各班会議
6月	**3日(土)**	**斎王まつり　祓の儀　前夜祭**
6月	**4日(日)**	**斎王まつり　斎王群行**
	5日～10日	古賀整理片付け 支払い等
	15日(木)	総合企画会議
7月	1日(土)	大淀遊開き(斎王・女別当)参加
	20日(木)	フォトコンテスト・歌合せ応募締切 フォトコンテスト　応募96名　222点出品名 歌合せ　応募13名　31点
8月	3日(木)	フォトコンテスト・歌合せ選考会
	11日(金)	フォトコンテスト・歌合せ入賞入選作品飾付け (いつきのみや体験所)
	20日(日)	フォトコンテスト・歌合せ入賞者表彰式
	25日(金)	フォトコンテスト・歌合せ入賞作品百五銀行へ展示貸出し 本部役員会

隆子女王の墓


隆子女王の墓

隆子女王は醍醐天皇の孫女で、円融天皇の時代の第四三代斎王である。

斎王に卜定（亀の甲での占いで選ばれること）されたのは、安和二年（九六九）。

宮中の初斎院に引き続き、嵯峨野の野宮で、潔斎生活を送り、天禄二年（九七一）斎宮に向け出発した。しかし、天延二年（九七四）わずか三年の在位で、

当時、蔓延していた天然痘（疱瘡）にかかり斎宮で亡くなった。

斎王が斎宮で亡くなったのは斎王制度が確立して以来初めてのことであった。

斎王は帰京することなく斎宮に葬られた様である。

現在、明和町算所にある墓は宮中庁の管理で、林の中にあり、外から塚の様子は分らないが、隆子女王の面影を忍ばせる清楚なたたずまいを見せている。

（小林　順一）

楠森神社跡の前で

エンマ川と絵馬堂

中町付近の参宮街道から明和町役場へと向かう道路沿い、小さな川があるのをご存知だろうか。

地元でもその存在に気づく人の少ないこの「川」は、川というより水路と呼んだほうが相応しいほどの川幅しかない。

昔は小さな流れながら、それなりに水を湛えてゆったりと流れていたのだろうが、現在はその流れも止まっているように見える。

この川がエンマ川であり、「絵馬川」ともいわれている。名前のいわれは、かつてこの付近に「絵馬堂があったことによる。斎宮の絵馬堂といえば、能『絵馬』の舞台となっており、喜多流では、この能の曲名を「えんま」と読むということをどこかで読んだ。

節分の夜、伊勢神宮に詣でる勅使がその途中斎宮に寄ると、日照りを占う白絵馬を持った老人と雨を占う黒絵馬を持った姥に出会うところからこの能は始まるという。

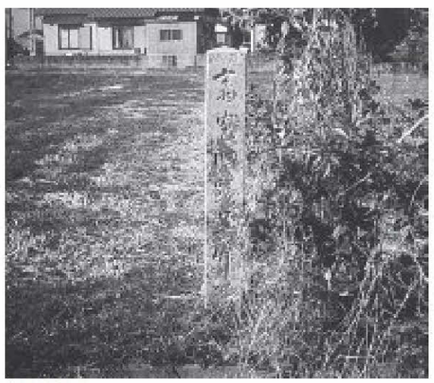
エンマ川

又、大晦日の夜、堂の絵馬をアマテラスが架け替えて明年の吉凶を占うという伝承は、『伊勢神宮名所図会』にも載せられている。

絵馬堂のあった場所は、かつての斎宮の東端と参宮街道が交わったあたりで、斎王が伊勢に参向する際には、斎宮の東端で祓をすることになっていたということから斎宮が廃絶後も、特別な場所として伝えられていたのかもしれない。絵馬堂自体は明治の終わりまであったそうだが、廃された後、掛けられていた絵馬は、竹神社に寄贈され現在に至っている。

エンマ川はかつての斎宮の方格地割の東端の大溝とも重なる。その昔、斎宮が役所や宮殿として機能していた頃、その雨水や日常生活の水を、官人や女房たちの笑い声とともに、緩やかに流していたのかもしれない。

（藤田ゆかり）


呉竹の碑

大淀の業平松は三代目

一代目業平松は硯と文机になった

おおよどの松は古くから有名で、『神都名勝誌』によると大淀八景と呼ぶ大淀の名勝地の一つとして、『業平松の夜の雨』としてあげられている。おおよどの松は、大淀から尾張に向かう渡し場の近くにあり、その大きさ、枝ぶりは立派でひときわ目立って美しかったと伝えられている。業平松の由来について『大淀名勝誌』には伊勢物語に因んで業平松と呼ばれるようになったと書かれている。

八脚門

初代の松については、享保十一年今西行と言われた歌法師、以雲が土地の人の伝承を記しているが、それによると、

延宝の初め枝は四方に広がり陸前およそ百歩もあって、根元は皮ばかりうつほになって立っていたのが、延宝六年の荒き風に千数百年もの齢をついに終息した。

と記されている。

その後、徳川四代将軍家綱の頃、代官古郡文右衛門重年という人が名木の倒れたことを惜しみ形のよいかわりの松を二本植ついだといわれる。

あまりに銘木なので代官は硯を、度会常和は文机を倒木から造ったという。

二代目の松の一本を「業平松」、他の一本を「行平松」と呼ぶようになったのは、おそらく業平の兄で歌人の行平の名をとって兄弟松という意味で名付けられたのであろう。

この行平松は昭和二十八年頃、松喰虫に侵食されたあと、台風で倒れた。

二代目の業平松は、昭和十二年十一月五日に、県より天然記念物に指定されたが、昭和四十五年頃から老衰が急速にすすみ昭和五十年四月には完全に枯死し、地元民により切り倒された。銘木として伊勢市に売られ、一部根元は公民館に残された。樹齢は四百年を超えていた。

その後三代目の松は昭和五十三年二月十一日の建国記念日の意義ある日に斎王にまつわる松ということで伊勢神宮から、五年生の黒松二本を寄贈され、「業平松」「行平松」として、地元地区の人々の手で植樹され現在に至っている。

ひさざ池

業平松にて

ひさざ池　明星本郷

有弓神社跡の標柱から、東へ五〇m程のところにある、小さな森の中にあるのがひさざ池です。標柱は池の北側にあります。

『明和町史』によると、「古来、宇爾郷では、ひさざ池の水を汲んで、神宮の土器の調製を行った。以前は、この池に片葉の葦が生え、池の主は白うなぎとされ、旱魃の折には雨乞いを行っていたと伝えられている。」とあります。

〈参考文献〉
業平松記念碑
三重の歳時記

（企画班長　八田　明美）

斎王群行絵巻（斎宮歴史博物館 蔵）

伊勢物語絵巻

大淀の松を詠んだ歌（業平松）

大淀の　松はつらくも　あらなくに　うらみてのみも　帰る波かな　　『新古今集』

大淀の　うらたつ浪の　かへらずば　かはらぬ松の　色をみましや　　『斎宮女御集』徽子女王

大淀の　浜に生ふてふ　みるからに　心はなぎぬ　かたらわねども　　『伊勢物語』

大淀の　霞吹きそう　松風に　うらみてのみや　かえるかりがね　　『夫木集』俊成女

さなくても　秋の面影　大淀の　松はつらしと　うらかぜぞ吹く　　『御裳濯集』定家

大淀の　御祓幾世に　なりぬらん　神さびわたる　浦の姫松　　『拾遺集』源兼隆

かずかずに　思う心は　大淀の　松をうらみる　浪の音かな　　『千五百番』後鳥羽院

大淀の　浦路のどけき　春の日に　かすみぞ残る　松のむらだち　　『夫木集』順徳院

霞みゆく　松さへつらし　大淀の　浦立つ浪の　かへるかりがね　　同右　家隆

つらからぬ　松も恋ふらく　大淀の　霞ばかりに　かかる浦波　　『拾遺愚草』定家

しるらめや　君がつらきは　大淀の　うらみてかえる　波をかぞへて　　『李華集』宗良親王

大淀や　つれなき松の　風だにも　波間しづけく　月をみるかな　　北畠国永

以上のほか関白左大臣、行意、有家など高官・高僧の歌が、『勢陽雑記』、『伊勢歌枕考』などに残されている。

君やこし
我やゆきけむ　思ほえず
夢かうつつか　寝てか醒めてか
恬子内親王「古今和歌集」

昨夜貴方がお出で下さったのか、私が参ったのか、はっきり覚えていません。夢でお逢いしたのでしょうか、現実だったのでしょうか、また、眠っている間の事であったか、目の覚めている間の事であったか、とんと覚えておりません。

大淀の浦を詠んだ和歌（大淀浦）

大淀の　浦より遠に　行く雁も　ひとつにかすむ　蜑の釣舟　　『新拾遺集』知家

大淀の　浦にかりなす　みるめだに　霞にたへて　帰るかりがね　　『新古今集』定家

大淀の　浦より越路に　行く雁も　一つに霞む　海士の釣舟　　正三位　知家

大淀の　浦風かすむ　あけぼのに　雲井の雁の　おとづれて行く　　御集　後鳥羽院

もしほやく　海士のたく縄　春くれば　霞ぞふかき　大淀の浦　　建保三百年集　定家

大淀の　海士の乙女や　春なれば　神のはつもの　みるめ刈るなり　　同右　家隆

大淀の　淀の花貝　拾うても　千尋ばかりの　あやめをぞひく　　同右　慈鎮

せどぐちに　たけるうしほの　大淀の　よどむそこるの　なき嘆きかな　　『名寄』西行

いかにせむ　けふ大淀の　浦に来て　あやめや引かむ　貝やひろはむ　　同右　西行

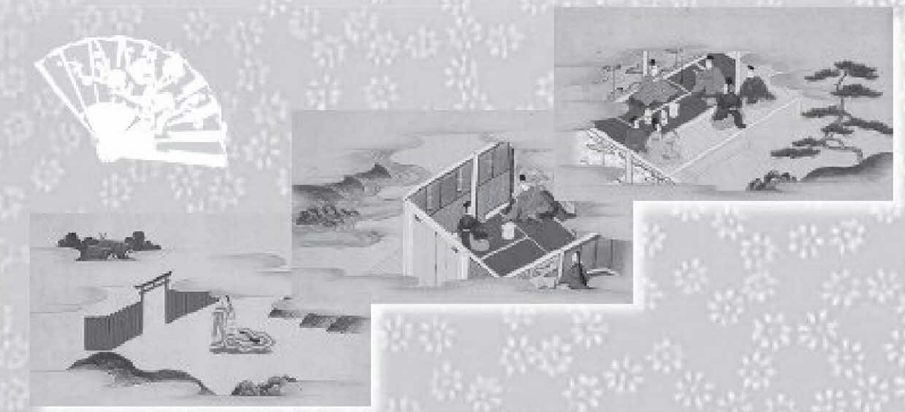
大淀の　みるめはうとく　なりぬとも　浪にかりがね　秋を忘るな　　『夫木集』慈鎮

しき島や　みちくる潮の　大淀に　みるめもあかず　蜑の釣舟　　『拾玉集』荒木田成定

などがあります。

かきくらす
心の闇に　まどひにき
夢うつつとは　世人さだめよ
藤原朝臣「古今和歌集」

昨夜のことは私も真暗になった闇のような心の状態だったので惑ってしまいました。それが夢か現実か一向に覚えぬが、そのいづれであるかは局外の世間の人が定めてくれよう。



楠森神社と斎宮跡の荒祭宮

榎村　寛之

斎宮跡の東の端、エンマ川と呼ばれる川沿いに「楠森神社跡」と記された石碑があります。明治時代に斎宮跡を顕彰するために立てられた碑の一つですが、今は由来を知る人も少なくなっています。

この神社については、昭和十年（一九三五）に斎宮商工会が刊行した『斎宮村郷土誌』という本に詳しい説明があります。これは戦前の斎宮村の様子を知ることができる貴重な資料で、今は『郷土史に見る斎王』（明和町　一九五八年）という本の中に再録されたものを見ることができるものです。そこに、当時すでになくなっている神社として、「楠森神社」と「荒祭社」という神社の記述が見られます。

それによると楠森神社は、

「大字斎宮笛川北方（北野道を北に二町、溝を隔てた西側畑中）に在った町屋・中西・下の三郷の産土神です。祭神は八柱神で、元は『八王子』と申しました。社地を紅葉の森と唱へ、古くから荒祭宮と称する神殿の在った神域で、老樹が鬱蒼としてゐました。町屋郷建置の時から奉祀した産土神であります。」

と説明されています。

一方、荒祭社については、

「祭神は瀬織津姫神で、由緒としては、長元四年（一〇三一）六月、大神宮の御祭の砌大雷電あり、その真最中に、御親拝中の斎王に皇大神宮の神託あり、寮頭夫妻の不敬な行状に対して厳しく御戒めを蒙ったので、翌七月寮頭の造り建てた禿倉二宇を寮域外に持出して焼き掃った。実はこれが荒祭・高宮の二神であったので、寮域の北野なる紅葉の森に奉斎したものであると伝えられてゐます。それから百二十年を経た仁平二年（一一五二）の記録によれば、二社共に斎宮寮で管轄し、両神殿を造営したと出てゐます。」

としています。

ところがここには、どういう資料に由来しているのかが書かれていません。しかしこれには元になった文献があるのです。それは、幕末から明治にかけて神宮の禰宜を務めていた国学者、御巫清直の著書『神宮神事考證』の中の「斎宮村神社来由考」の「楠森社」の項目です。そこには、

・楠森社は町家郷の産土で、もとは八王子と称し、社地を紅葉の森と称していたこと。

・紅葉の森には楠森社とともに古くから荒祭宮という神殿があったこと。千木堅魚木を揚げた社殿だったこと。

・絵馬殿や黒木の鳥居ももともとはこの社の一部であったと推測できること。

・『太神宮諸雑事記』によると、長元四年六月十七日の太神宮の御祭で、斎王が御玉串を供奉する以前に突然大雨が降り、斎王が託宣を始めたこと。

・斎王は皇太神宮の第一別宮の荒祭宮であると名乗り、斎宮寮頭の藤原相通とその妻の古木古曽が、夫婦と男女の子供と女房共に、二所太神宮と荒祭と高宮と五所の別宮が付いたと称し、勝手な祭を行っていると糾弾したこと。

・七月六日に神宮の禰宜らが寮頭館に行き、「寮頭の造り立てたた禿二宇」を域外に取り出し、四保、つまり周辺の住民に焼き掃わせたこと

・この禿は荒祭・高宮と号していたが、どうやら焼き捨てたのではなく紅葉の森に移して奉祀していたらしいこと。

・「仁平二年の外記局記」に、斎宮寮内院並びに荒祭高宮両神殿を立てる日時についての陰陽寮への勘文があり、この段階でも斎宮寮が管轄していたらしいこと

・その後斎宮は廃絶したが、荒祭宮は産土として残ったらしいこと

・高宮は算所村の産土が高御前社のあった所に造られたという伝承があり、二つの祠が同じ玉垣の中にあって楠森神社と荒祭宮と同様なので、これだと考えられること。

などが記されています。一読して『斎宮村郷土誌』がこれをもとにしていたことは明らかです。しかし、よく読んでみると、横線で示したように、清直の文章にもかなりの推論が混じっていることがわかります。ここで言う長元四年（一〇三一）の託宣とは、長元の託宣として知られている斎宮・伊勢神宮史上の重大事件です。この時に二つの祠が焼き捨てられたことは『太神宮諸雑事記』に記されているのですが、それが残っていたというのは「仁平二年（一一五二）の外記局記」に基づく清直の推測なわけです。

ではこの「外記局記」とはどういう史料でしょうか。外記とは太政官に属して公文書や行政・議事記録などを作成する係りのことで、外記局記とは外記日記ともいい、外記が付けていた太政官の業務記録のことです。しかし外記日記の本体は早くに散逸しています。つまり清直が見た史料は外記局記ではあり得ないのです。しかし外記日記はしばしば歴史書に引用されることがあり、特に平安時代後期に作られた『日本紀略』と『本朝世記』という書への引用はよく知られています。そして、清直が引用した史料は、『本朝世記』に見られるのです。ちなみに仁平二年ではなく、仁平三年五月二十六日条です。

この史料は

陰陽寮

撰び申す伊勢斎内親王内院ならびに荒祭高宮両神殿を立たせるべき雑事の日時

始めて木を作る日時

六月一日己未　時は巳の二点

立柱上棟日時

十三日辛未　時は卯の二点

立柱次第　先に北、次に南、次に西、次に東

仁平三年五月二十六日

権助兼暦博士　宣憲

雅楽頭　泰親

頭　憲栄

というもので、同年九月に群行した斎王、鳥羽天皇の皇女妍子内親王の出発に合わせて斎宮内院を整備した時のものです。清直が見た史料の出典は、まずこれに間違いありません。

しかしそれでもなお問題が残ります。これだけでは、荒祭宮と高宮が長元の託宣に関連した神社なのかどうかがわからないからです。この書き方なら、例えば、斎宮の内院と内宮の別宮である荒祭宮、外宮の別宮の高宮を建てるとも取れるのです。

長元の託宣については、『太神宮諸雑事記』とともに、当時の大納言であった藤原実資の『小右記』

という日記にも詳細に記されており、こちらでは都でのこの託宣への対応の経緯など、かなり詳しい経緯が記されています。そして『小右記』は、相通が祀っていた「宝小倉」が、「内宮・外宮御在所」だったとしているのです。『太神宮諸雑事記』は伊勢神宮側の記録ですから、内宮・外宮の偽物まで作られていたとは書きにくかったとも考えられますが、それでも相通夫婦には内・外宮が付いたとしています。つまり、破壊された小祠は荒祭宮、高宮ではなく、内・外宮の可能性が高いのです。

そして、仮に荒祭宮・高宮だったとしても、焼き捨てられたと記録されている祠が秘かに祭られていたのならともかく、百年あまり後に国家的に補修造営されているのは不思議です。

さらに疑問なのは、仁平三年に立てられたとする荒祭と高宮が斎宮関係の施設だとすると、斎宮内院近くにあると読めるということです。事実、楠森神社伝承地は、奈良時代末期に造営された斎宮の区画、方格地割の東の端に入っています。長元四年に破却された祠は、斎宮の域外に取り出されて焼き捨てられたとしています。ひとたび破却されたものが斎宮の区画の中に戻されて祭られるとは考えにくいことです。

つまり、『太神宮諸雑事記』の言う荒祭・高宮と、仁平二年の荒祭・高宮が同じ社だとする御巫清直の説は必ずしも正しいとは言えないのです。

同じく『郷土史に見る斎宮』に再録されている『明治十六年旧村地誌』の「伊勢神宮国多気郡馬之上村」の項には、美里神社という神社に高ノ御前と司天神の二座の神が祀られており、その高御前は、斎宮寮廃絶後に高宮を移したものだという伝承を記しています。

また、同書では斎宮寮の廃絶後、「荒祭宮は斎宮村の内、町屋郷に」、そして高宮はここに移したとしているのですが、この説では、長元の託宣の後、荒祭宮は方格地割の中に残し、高宮は外に出したことになり、やはり不自然です。

あるいはこういうことも考えられます。長元の託宣の後、伊勢神宮は斎宮への影響力を強め、斎宮寮の助（次官）は伊勢神宮の太神宮司を掌握する大中臣氏から出るという慣習も成立します。そのころに、荒祭宮と高宮の名が僭称された苦い経験を踏まえて、神宮が正式に荒祭宮と高宮の分祠を斎宮の近くに置き、それが斎宮の廃絶後も残った、その頃には方格地割も無くなっていたので、その内外は関係なかった、という仮説です。しかしそれにしても、中世の伊勢神宮参詣記録にこれらの神社の名が見られないのは不審で、本当に斎宮廃絶以来ずっと残っていたのか、という疑問もあります。

なお、興味深いのは、清直が「斎宮の絵馬」で知られる絵馬殿と黒木の鳥居をこの荒祭宮の附属建物だとしていることです。この絵馬については、室町時代より「斎宮絵馬の辻」として、斎宮と関連づけて語られているので、荒祭宮との関係で論じることには無理があります。そして絵馬の辻に論及した室町時代の参詣史料では、今のところ荒祭宮に関わる史料は見つかっていません。つまり、絵馬の辻の方が荒祭宮より有名だったわけで、絵馬の辻と荒祭宮を関係づけることには無理があるように思われます。

このように、楠森神社と荒祭宮の歴史についての御巫清直説には、少なからず問題があり、これらの神社の性格は、なお検討を要する点が少なくないのです。

（斎宮歴史博物館　学芸普及課長）

斎王ものしりナンバーワン

万葉集に弟への哀傷名歌を詠んだ斎王は誰？

天武朝の大来皇女でしょう。弟の大津皇子が謀反の容疑で逮捕され、鵜野皇后（後の持統天皇）より死を賜りました。

わが背子を　大和へやると　さ夜ふけて　暁露に　わが立ち濡れし

二人行けど　行き過ぎがたき　秋山を　いかにか君が　独り越ゆらむ

が有名です。

親・子・孫と三代斎王になったのは誰？

聖武朝の井上皇女、光仁朝の酒人皇女、桓武朝の朝原皇女　でしょう。井上斎王は退任後、光仁天皇の皇后となり皇太子　他戸親王を生みましたが権力争いに巻き込まれ謀反の疑いをかけられ親王とともに幽閉され、その二年後に亡くなった悲劇の斎王として知られています。

伊勢物語のモデルとされる斎王は誰？

恬子（やすこ）斎王でしょう。狩の使いとして都からやってきた在原業平との熱いロマンスが伝えられています。

きみやこし　我や行きけむおもほえず　夢かうつつか寝てかさめてか

かきくらす　心のやみに迷ひにき　夢うつつとは世人さだめよ

が有名です。

三十六歌仙にも入り 斎宮女御と呼ばれた斎王は誰？

徽子女王でしょう。八歳で斎王に卜定され、十年近く斎宮に奉仕されたのち村上天皇の後宮に入り女御となりました。夫君崩御され、しばらくすると　一人娘の規子内親王（村上天皇第四皇女）は二十七歳で円融天皇朝の斎宮に卜定されました。娘とともに野宮にも入御されました。娘規子斎王の伊勢群行にも同行されました。これはまったく前例のないことでした。

斎宮で病に倒れた斎王は誰？

隆子女王でしょう。天然痘（疱瘡）にかかり亡くなりました。

現在、お墓は宮内庁に管理されています。

群行衣裳

長奉送使【ちょうほうそうし】

監送使ともいう。斎王一行を伊勢まで送り届ける群行の最高責任者。沿道における警察権が与えられており、任を終えると直ちに帰京しました。

検非違使【けびいし】

平安時代から室町時代にかけて京中の警察を担当した職。元来、平安京の治安維持は京職や衛府の任であったが、特定の官人に京中の警察を担当させることがあり、それが検非違使となり、やがて衛府や京職・弾正台などの権限を吸収し、王朝国家有数の警察機関となったのである。

看督長【かどのおさ】

検非違使庁の下級職員で、身分は火長。弘仁式制では左右それぞれにつき二人と定められ、貞観・延喜式制に継承されているが、その後次第に増員され、長元八年（一〇三五）の『看督長見不注進状』（『平遺』五二九～三七）では左右合わせて十五人を数える。獄直や犯罪の捜査・追捕等を任務とする。時を中心として編制される警察部隊の一員として出動することがあるが、単独ないし少数の従者を率い、事に従うことが多い。しばしば行き過ぎた捜査や追捕を行い、京民から頼りにされる一方で、恐れられもした。その武力は悪鬼魔神を懲伏するという信仰を生み、『徒然草』二〇三には主上御悩の時、五条の天神に看督長の観をかけることが見え、『神道名目類聚抄』には守門の神を看督長と称したとある。

2番 綏（おいかけ）

1. 冠（かんむり）
2. 緌（おいかけ）
3. 太力（たち）

随身【ずいしん】

随身とは、貴族が外出する際に警護にあたった近衛府の官人を指します。それには高い教養と優美な容姿が求められたと云います。

駕輿丁【かよちょう】

斎王の乗る輿（宸輦輦）を担ぐ人です。

斎王【さいおう】

天皇の即位ごとに、未婚の内親王（天皇の娘）あるいは女王（天皇の兄弟の娘など）の中から占いで選ばれ、天皇の譲位や崩御、あるいは肉親の不幸などにより解任されて、都に帰る決まりになっていました。伊勢神宮の祭りには、六月・十二月の月次祭と九月の神嘗祭に関わるのみで、ふだんは斎宮の中で都と同様の生活を送っていたものと考えられています。

古代から中世にかけての文学作品に登場する斎王も多く、『源氏物語』『伊勢物語』など、多くの文献に残されています。

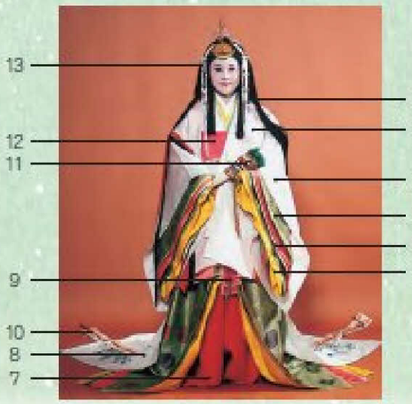
十二単【じゅうにひとえ】

十二単とは近世になってからの呼び名で、正しくは女房装束、または裳唐衣といいます。単衣の上に袿を重ね、打衣、表着の上にベストのような唐衣をはおり、腰には前部のないプリーツスカートのような裳をつけます。貴族の女性の晴の衣裳（正装）です。

髪は垂髪、作り眉。上衣は、上から順に唐衣、表着、打衣、袿、単となっています。唐衣は袿、袷合わせがなく、上からはおります。表着は上の御衣とも呼ばれる垂領広袖の袷仕立てです。打衣は砧で打って光沢を出したところからこの名がありません。形は表衣と同じで紋様はありません。袿は、内衣の意味で、垂領、広袖の袷仕立てで地紋があり、数枚重ねて用います。単は袿と同形ですが、裾、丈ともに長く、単仕立てで裾はひねり仕立てになっています。下衣には袴と裳をつけます。袴は緋の長袴（若年未婚は濃色）で、裳は背にあてて結び、後に長く垂らして引きます。

13番 日陰の糸（ひかげいと） 又は 玉かずら

1. 垂髪（たれかみ）　2. 唐衣（からぎぬ）
3. 表着（うわぎ）　4. 打衣（うちぎぬ）
5. 衣（袿）（きぬ（うちき））（枚数を重ねている）
6. 単（ひとえ）　7. 長袴（ながはかま）　8. 裳（もの）（全体）
9. 裳の小腰（ものこのこし）　10. 裳の引腰（ものひきこし）
11. 檜扇（紙扇）（ひおうぎ（かみおうぎ））　12. 帖紙（たとうがみ）
13. 日陰の糸（玉かずら）
※斎王が付けていたかどうかは定かではありません。



内侍または命婦【ないしまたはみょうぶ】

斎宮で働く女官たちの最高責任者として、乳母や女嬬の上にいる立場にありました。

女別当【にょべっとう】

内侍や宣旨が、斎王の住むエリアで公的性格をもつ仕事をこなす女官であるのに対して、乳母のように、斎王のプライベートな「宮家」としての用向きを担当していたのではないかと考えられますが、詳しいことはわかりません。

乳母【めのと】

母親に代わって養育を受け持つ女性で、斎宮には、斎王個人の「家」に仕える存在として、二名ないし三名が務めるようになっていました。

女孺【にょうじゅ】

「めのわらわ」ともいう女官で、一等から三等に分かれており、それぞれに課せられた実務を担当していました。

采女【うねめ】

都では、地方の郡司の娘から選ばれ、天皇の御前などに奉仕していました。しかし、斎宮に采女がいたかどうかについてはよくわかっていません。

童・童女【わらわ・わらわめ】

都の官人が、家族で斎宮に赴任したということも考えられますから、その子供達が斎宮内に住んでいたという可能性はあります。しかし、群行の一員として加わっていたということはなかったようです。

第二十四回 斎王まつり

フォトコンテスト 斎王うたあわせ

斎王賞

「いつきの舞」 伊勢市 向城 巽

町長賞

「竹の都に思いをはせて…」 松阪市 後藤ミユキ

明和町教育長賞

「舞い」 明和町 西岡育生

明和町議会議長賞

「子供斎王」 明和町 内田直樹

第七回 現代版「斎王うたあわせ」

斎王賞

額髪に挿す 別れの御櫛は 小さき黄楊
白きお頬に 虹美し 玲子
津郡市 鷗劍 綾子

業平賞

斎の斎へ あくがるる魂を おいたまま
現し世の身は 汽車に乗り込み
群馬県 近内 悟

明和町議賞

巻絵巻 斎王まつり 優雅なり
のどかなる街 人ほのぼのと
津 市 今井 保子

歴史博物館長賞

斎王の やさしき笑顔 昔と今に
群行が行く 歴史あるみち
津 市 高垣 雅夫

斎王まつり代表賞

いつき野に 咲く花よりも 美しき
斎王のせて 群行ぱゆく
松阪市 芳賀 かよ子

〔募集要項〕

形式 短歌（五・七・五・七・七）

応募方法 応募用紙もしくは葉書一枚につき一首インターネットでも可（一人で何通でも応募は可能ですが、自作で未発表のものに限ります）

内容 自由

締切 平成19年7月20日（金）消印有効

応募先 斎王まつり実行委員会「斎宮うたあわせ」係

〔選考方法・賞〕

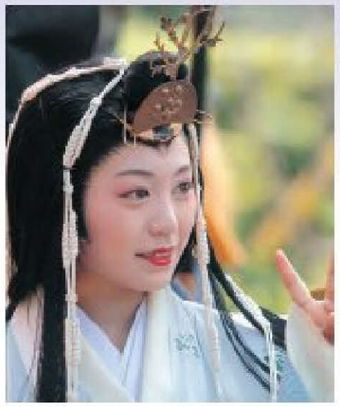
斎王まつり実行委員会で選考委員を選出し、各賞を決定します。

特別賞 五首 入選歌 五十首ほど

斎宮歴史博物館長賞

「ちびっ子斎王」 伊勢市 島田てるみ

特別賞



「采女」 伊勢市 安田佳弘

特別賞

「月光に魅せられて」 亀山市 早川新一

特別賞

「到着」 伊勢市 島田良平

特別賞

「光（ひかり）」 松阪市 松田寿和

特別賞

「竹の都」へ…前夜 松阪市 後藤和久

フォトコンテスト

●**応募方法**

・応募には郵送と斎王まつり事務所受付の2通りがあります。

・応募作品は応募者本人が撮影したもので1人3点以内、未発表の作品に限ります。

・カラー、白黒作品でサイズは四ツ切のみ

・応募票の各項目に楷書で記入し、題名、お名前には必ずふりがなをつけてください。

・応募作品の裏面に応募票を貼付してください。（コピーも可）

●**締切**

・平成19年7月20日（金）消印有効

●**郵送方法について**

・郵送中の事故、破損については責任を負いかねます。

●**選考方法・入賞・入選**

・作品は斎王まつり実行委員会で選考いたします。

・入賞は、5賞（斎王賞他）、入選20点程度とします。

・発表は、8月5日前後、新聞紙上にて発表します。

・入賞・入選作品については、改めてネガをお借りすることがあります。

・パンフレットやポスター、ホームページなどへの使用権は主催者に帰属します。

●**作品の返却**

・応募作品はご返却いたしません。

●**応募先**

斎王まつり実行委員会「フォトコンテスト」係

◆応募・問い合わせ先
〒515-0321
三重県多気郡明和町斎宮28811番地
斎王まつり実行委員会事務局
電話 0596-52-0054
FAX 0596-52-7274

第22代斎王
稲葉　友佳子

斎王役を務めて

私には遠い遠い存在であった十二単を身にまとった時から、私の心は遥か昔の古代ゆかしき時代へと移って行きました。

天皇の名代として伊勢神宮に仕えた未婚の皇女、斎王。その誇りと責任、そして親しい人、愛する人との別れ…。歴代の斎王はどのような思いでこの伊勢の地に赴いたのでしょう。大淀業平公園での禊の儀、ゆらゆらと揺れる松明の灯りの元での前夜祭、初夏のまぶしい古道を行く葱華輦の中でそんな事を思い、まるで私もその一人であるかのように錯覚してしまう程、優美で幽玄な素晴らしいお祭りでした。私にとっては生涯の思い出となり、今後の大きな励みとなります。

私だけでなく、多くの人に夢物語を見せて下さった実行委員会の皆様始め、関係者の方々に心より感謝申し上げます。そしてご声援を下さった観客の皆様、本当に有難うございました。斎王まつりが、もっと多くの人に知れ渡り、益々御発展されます事を心よりお祈り申し上げております。

子供斎王
西口　玲央

子供斎王を務めて

今まで斎王祭りを見ていて、私も参加したいなと思っていました。やっと四年生になったので、着物を着れるのが、楽しみで応募したら子供斎王に選ばれてビックリしました。

当日は、たくさんの人で、少し緊張したけど、いろんな人達の力で、すばらしいお祭りになりました。このお祭りが、ずっと続いていってくれたらいいなと思います。良い体験をさせてもらって本当に楽しかったです。

葱華輦復元模型（斎宮歴史博物館蔵）

悠かなる歴史の風　いま吹きわたる

斎王まつり実行委員会　代表　森下　清

斎王制度は、飛鳥時代（千三百年余り前）、天武天皇が伊勢神宮に「壬申の乱」の戦勝祈願をして勝つことができたことに感謝して、天皇家の御杖代として長女の大来皇女をここ「いつきのみや」に遣わし、それから南北朝時代まで、約六百六十年間続いた制度でした。都から五泊六日をかけ、斎王一行は「いつきのみや」まで群行してきたのです。そして、五十数代の斎王やこの地に関わった人々を偲び、「斎王まつり」は始まりました。

野花菖蒲が咲く初夏、今年も斎王まつりの季節がやってきます。第二十五回を迎える斎王まつりを、すばらしいまつりにしたいと、実行委員会は、皆様のご支援、ご協力をいただきながらがんばっています。

「いつきのみや」に、悠かなる歴史の息吹を感じにぜひお越しください。

主催■斎王まつり実行委員会

後援◎明和町、明和町教育委員会、国土交通省三重運輸支局、斎宮歴史博物館、（財）国史跡斎宮跡保存協会、（財）民族衣装文化普及協会、明和町観光協会
NHK津放送局、三重テレビ放送（株）、三重エフエム放送（株）、松阪ケーブルテレビ・ステーション（株）、近畿日本鉄道株式会社
取材協力・資料提供：奈良県五條市観光協会、御霊神社、桜井市観光課、巻城市農林商工課、巻城市観光協会
問い合わせ◎斎王まつり実行委員会事務局　TEL 0596-52-0054 FAX 0596-52-7274
http://saioh.sub.jp　定価100円　再生紙（古紙100%）を使用しています。